

## 鹿児島タイプ二型アクセントの音調句 Prosodic Sandhi and its Domain in a Two-Tone Japanese Dialect

児玉 望

Kodama Nozomi

### § 1. 音調句と句音調

(音調)句とは、川上(1957)が段階観を脱して東京式アクセント体系の音韻解釈上の問題を解決するために提唱した、アクセント単位より大きな音調段落で、アクセント単位の型の弁別にとっては非弁別的である何らかの音調上の特徴(句音調)により実現する。さらに、上野(1984a)は、東京方言以外の多くの日本語方言アクセントに同様の音調段落が見出しうることを示した。具体例をあげると、次の例で{ }で示した部分が「音調句」に相当する。例ではこの音調句は|で区切られたアクセント単位から成り立っている<sup>1)</sup>。

1a. {赤い|鼻の|トナカイ}

1b. {鼻の|病気}

2a. {白い|花の|タンポポ}

2b. {花の|名前}

句音調が平上がり句音調で「句の第2モーラに向けてピッチを上げる」という形で実現する東京方言では、「鼻/花」のハとナの間の高さの差は、1a, 2aと比べて1b, 2bが明らかに大きい。音調句は、弁別的な音韻論上の単位であるから、3a, 3bのような音調句の区切り、つまり句音調としてのピッチ上昇を加えた実現形も、東京アクセントとして区別可能な音調形である。

3a. {赤い|鼻の}{トナカイ}

3b. {赤い}{鼻の|トナカイ}

これらは、1aとは何らかの点で意味が区別されると受け取られる。たとえば、3aでは({長いお鼻の}{象さん}のように)「話し手がトナカイと呼ぶものは—限定するまでもなく(みな)—赤い鼻だ」というような含意を読み取る解釈も可能であり、3bのほうは「鼻のトナカイ」と呼ばれる特殊な「トナカイ(動物とは限らない)」に限定してその中の赤いものについて述べているように感じられて奇異である。このような、句音調の実現に発話者の意図する意味の区別が関わっていることを示唆する事実は、「音調句は意味から予測できる

か」という問題をはらんでおり、統語構造と音韻構造の間の写像関係に関する理論的関心や、あるいは音声合成・日本語教育に際しなるべく自然で曖昧さのない発話に近づけるといふ応用言語学的関心からこの問題を扱った研究も近年多い。たとえば、郡(1997:189)は、音調句という概念ではなく「アクセントを弱めて読む場合」という表現でアクセント単位の句への統合の条件を以下の四つの場合にまとめている。

- ① 名詞が、その直前の形容詞や「名詞+の」で意味を限定されている時
- ② 述語が、その直前の副詞的成分や格成分によって意味を限定されている時
- ③ 並列されていて、直前の語と意味的に一体化している語
- ④ フォーカスがある語の後の語群

また、④に関連し、「アクセントを強調するのはフォーカスがある時」(=④')とする。①から③が統語的条件であるのに対し、④や④'は語用論的ともいべきレベルの異なる条件である。3a, 3b の例では、それぞれ「赤い鼻のシロクマ」や「赤い腹のトナカイ」のような発話の訂正の発話として、

4a. {シロクマでは} {ない}

4b. {腹では} {ない}

が後続する場合のように、対比的な文脈での解釈がこれにあたると考えられる。この場合、「トナカイ・鼻」に強勢が伴うのが自然であろうが、結果として実現する句の音調が同じであっても、上述のような、①に関わる条件から予想される特殊な意味にはならない。このように、東京方言における句への統合は、複雑な要因によって決定するらしいことが知られている。

本稿は、上野(1984a)において存在の可能性には言及されながら例示されていない、二型アクセントにおける句音調の一例として、鹿児島市方言アクセントの句音調と音調句の記述を試みるものであるが、本論文においては、句音調の音韻論上の単位としての側面を中心に論じ、句への統合の可否を決めるような構文論上の条件については、あくまで記述的なレベルで論じるにとどめる。

上野(1984a)では、句音調とアクセント型の弁別的特徴の両方に基づいて観察可能な音調実現形が決まることから、型の弁別には関与しない句音調を抽出しておくことがアクセントの音韻解釈にとっても不可欠な手続きであるという立場に立って諸方言の句音調が取り上げられている。本稿でもこの観点を重視し、まず鹿児島市方言の二型アクセントの実現音調を、句音調と型の弁別特徴とに分析することを試みる。データとしては、木部(2000)のものを中心にし、さらに可能な音調句のデータを筆者の内省により補う。この引用論文

自体、さまざまな組み合わせの文節の接続におけるアクセントの実現形を上げることにより、句音調を考慮した音韻解釈を試みているのであるが、にもかかわらず、音調句による違いを示せるようなデータが不足しているように思われる。つまり、同じ文節の組み合わせであっても一つの音調句になるのか、二つの音調句の組み合わせになるのかによって、二つの異なる実現形がありうる、という視点が欠けているのである。

筆者は、10歳から18歳までを鹿児島市で過ごし、鹿児島市方言のある社会方言（性・世代）の話し手であり引用論文で扱われている高年齢者方言についても少なくとも受動的な知識があるため、内省により自在に音調句の区切りを変えた形を得ることができるという有利な立場にある。引用した木部氏のデータは、非母語話者による観察データとしてたいへん精確であり信頼性があることは強調しておきたい。むしろ、どんなに精確な観察によっていても、句音調を明らかにできるようなデータが不足していると異なる解釈になることがありうる、という点が本稿で述べたい点である。

次いで、どのようなアクセント単位が音調句に統合されるかを記述する。筆者の関心は、日本語諸方言の音調句がどの程度共通していてどの程度異なるかを比較するための資料となりうるようなデータを提供することにより、方言アクセントの記述研究や歴史研究に役立てることにある。したがって、原則として表層レベルで句構造がどのようなまとまりで統合しているかを包括的に列挙することとし、たとえば形態論レベルで構文論上の1文節が複数の音調句に分割される場合と複数の構文論上の文節がひとつの音調句に統合する場合というように、構文論レベルでは異なる現象であることが疑われるものも一括して扱う。二型アクセント方言に特有の事情としては、もうひとつのアクセント単位統合メカニズムである「一般複合法則」（1アクセント単位への統合）との交替現象にもとくに留意して記述することとする。

## § 2. 二型アクセントの音韻解釈と句音調

鹿児島市方言のアクセントが、アクセント単位の音節数にかかわらず二つの型のいずれかの形をとるいわゆる二型アクセントのタイプであることは、平山輝男(1936)をはじめとして、日本の方言アクセント研究史でも早い時期からよく知られた事実である。この二つの型の実現形は以下のようなになる。木部(2000)にならいピッチ上昇を“[”、ピッチ下降を“]”で表記するが、木部が長音符と“]”の組み合わせで表現する単音節下降調は“[]”で表わす。

### 5. 体言

「鼻」(A型) [ハ]ナ ハ[ナ]ガ ハナ[カ]ラ ハナカ[ラ]モ ハナカラ[デ]モ ハ  
[ナ]ワ (鼻輪) ハナカ[ザ]リ (鼻飾り)

「花」(B型) ハ[ナ] ハナ[ガ] ハナカ[ラ] ハナカラ[モ] ハナカラデ[モ] ハナ[ワ]  
(花環) ハナカザ[リ] (花飾り)

「気」(A型) []キ [キ]ガ キ[ニ]モ キ[バ]リ (気張り) キク[バ]リ (気配り)

「木」(B型) [キ] キ[ガ] キニ[モ] キボ[リ] (木彫り) キクバ[リ] (木配り)

## 6. 用言

「赤い」(A型) [ア]ケ [ア]カイ [アッ]カ アカ[カッ]タ アカケ[レ]バ アカカ  
[レ]バ アカカ[ロー]ガ アカア[カ]ト

「白い」(B型) シ[ロイ] シロ[カ] シロカッ[タ] シロケレ[バ] シロカレ[バ] シロ  
カロー[ガ] シロジロ[ト]

二音節以上の長さのアクセント単位では、A型では次末音節が高く末音節が低く、B型では末音節が高い。単音節のアクセント単位でもA型は下降調、B型は高平の二つの音調が区別される。体言に助詞がついたもの、用言の活用した形はいずれも語彙ごとに同じ型になり、また、1アクセント単位となる複合語は原則として最初の成分の型を保持する。鹿児島方言では、世代や性によって、活用形などの形態として固有の語形と共通語からの借用語形のどちらを使うかに差があるが、アクセントの型についてはどちらの語形でもほぼ同じ原則が観察される。(例：固有 キ[バイ]ガ=キバ[リ]ガ 「気張りが」)

以上のような各型の音調の観察については、先行研究でもほぼ差がないといってよい。ただし、留意する必要があるのは、このような1アクセント単位の言い切りによるデータは、もしも型の区別に非弁別的な句音調があるとすれば常に音調句のうち最初(および/あるいは最後)のアクセント単位に関わる音韻的特徴を実現しているはずであり、また、先行/後続するアクセント単位があってはじめて観察されるような、アクセント単位の頭位・末位の特徴(例：東京方言 「花」/hana/)が捨象されている、という点である。したがって、アクセント型のもつ弁別的な特徴だけを抽出するためには、複数のアクセント単位がひとつの音調句に統合されているような文脈で同じアクセント単位が現れる位置に応じてどのような音調をとるか、というデータが必要になる。

しかし、非母語話者の聞き取りによるアクセント調査でこの種のデータを得るために克服されなければならない困難は、時間の制約をはじめとしていろいろある。たとえば、協力的な資料提供者がアクセント単位ごとに明瞭なアクセント資料を提供しようとするれば、アクセント単位ごとに音調句を区切ったデータになりやすくなる。自然な、しかしそれで

いて明瞭な発話、という注文はなかなか説明しにくい。

この点で、内省の可能な母語話者の調査者はかなり有利である。たとえば、前節であげた例は、筆者の発話では以下のようになる。7a, 9a, 9b のような違いは、時間の限られた聞き取り調査では得ようとする意味の違いを説明することがむずかしいと思われるが、実際の語形が発音によって提示されてさえいれば、たとえば 9b のような不自然な意味をもつ（しかし自然な）発話とそうでない 7a, 9a は容易に区別されるはずである。

- |     |                         |      |
|-----|-------------------------|------|
| 7a. | {[ア]カイ   ハナ]ノ   トナ]カイ}  | = 1a |
| 7b. | {ハ[ナ]ノ   ビョーキ}          | = 1b |
| 8a. | {シ[ロイ]   ハナノ   タンボ]ポ}   | = 2a |
| 8b. | {ハナ[ノ]   ナマ]エ}          | = 2b |
| 9a. | {[ア]カイ   ハナ]ノ} {ト[ナ]カイ} | = 3a |
| 9b. | {[ア]カイ} {ハ[ナ]ノ   トナ]カイ} | = 3b |

以上のデータから推測されるのは、“[” が型の弁別に関与しない、句の最初のアクセント単位の特徴であり、弁別的な点は、“]” の位置が A 型では最終音節の前、B 型では最終音節の後、ということになる。B 型の “[” は、句音調の最後の位置では観察されない。

上述のように、複数のアクセント単位のデータを考慮に入れて鹿児島市方言の二型アクセントの音韻解釈を試みた論考が木部(2000)である。ところが、この論文の結論は、A 型の弁別的特徴が、次末音節の前後の “[” と “[”、B 型が末音節の前の “[” で、B 型末音節後の “[” は非弁別的、としており、母語話者の直観とは食い違う結果になっている。木部氏のデータ自体は母語話者の目からみてもかなり正確なものであり、この違いはもっぱら解釈の問題ということになるだろう。どこでこのような食い違いが生じているのかについて検証してみたい。

木部氏は 25 ページ以下で、まず、A 型と B 型の 2 アクセント単位の 4 つの組み合わせがどのように実現するかのデータの実現形をあげている。このデータを木部データと呼び、木部氏のデータ番号を本稿では < > の中に入れて引用することとする。<02> は木部データ(02)に相当する。木部データは、以下のような構文関係に基づいた分類になっており、この分類それぞれについて 4 つの組み合わせの実現形をあげる。

- (a) 主格 + 動詞 (b) 主格 + 形容詞 (c) 目的格 + 動詞
- (d) 連体関係 (連体格助詞「の」 / 形容詞連体形 / 動詞連体形) + 名詞
- (e) コソアド (+ 名詞 / 動詞・形容詞)
- (f) 副詞的用法 (動詞 / 形容詞 + 動詞)

これらをもとにした弁別特徴の分析に先立ってまず、木部氏は、(e)の指示詞コソアドに後続する位置での名詞のアクセントを調べている(p29)。指示詞は代表的な限定修飾語であり、後続の語とひとつの音調句を構成することが多いため、名詞の音調句の非初頭位置でのアクセントの実現形を得るためにしばしば用いられる調査項目である。データでは、指示詞の後の語の音調は、単独の場合と差はなく、ここで木部氏は、鹿児島市方言では「一般の文節接合と同じ位置しか占めない」として、これ以上の分析を行っていない<sup>2)</sup>。

しかし、注意が必要なのは、連体指示詞には限定修飾以外の用法もあり、この場合には指示詞単独で音調句を構成する、という点である。

10. このつばめ3号には乗客50人余りが乗っていましたが、乗客に怪我はありませんでした。(作例)

「今話題になった」というような意味での10に類する非限定的な指示詞は、典型的にはテレビのニュース報道のような話し言葉の文脈で現れ、先行文脈が失われぬ書き言葉の推敲では冗語的として削除されやすい用法とっていいと思われる。しかし、鹿児島市方言に限らず多くの方言はもっぱら話し言葉として使われる言語であり、非限定的な指示詞の用法は書き言葉よりもずっと現れやすい。統計的なデータがあるわけではないので用例をあげるにとどめるが、鹿児島方言の談話ではこのような指示詞が間投詞的に用いられることもしばしば観察される。

11. ハイ、ソラ死ンダ体ハマツゲナシ三尺ノ穴ニイドン、魂ノコッオ、ソソ魂モ、極楽ガアルチュ人ン胸ニャアット、ナカチュ人ニャナカッ。

「はい、そりゃ死んだ体は間違いなく三尺の穴に入るけれど、魂のことだよ。その魂(というもの)も、極楽があるという人の胸にはあるの、ないという人にはないの。」

12. ワタシモ、ソソヨカトコイニャエンガノシテ、マダイキダサンドン、マツゲナシヨカトコイオ。ソソ証拠ニミーンナ行クバツカイデ、マダ戻ッテキタ人ハオラナオ。

「私もそのいいところ(=極楽というところ)には縁がなくてまだ行けないでいるけれど、間違いなくいいところだよ。その証拠にみんな行くばかりでまだ戻ってきた人はいないだろう。」(11, 12とも『人間ショキチ物語』<sup>3)</sup>)

11の「ソソ魂(モ)」、12の「ソソヨカトコイ(ニャ)」はのソソは非限定的な用法で、音調句は二つに分かれる。これに対し、12の「ソソ証拠ニ」は指示詞が限定修飾用法であるため、自然な発話では一つの音調句を構成すると考えられる。つまり、鹿児島市方言でも指示詞に接続した名詞は単一の音調句を構成する場合としない場合の区別があるのであるが、しない場合の(非限定用法の)発話も自然な発話だと感じられる可能性が高いので

ある。「その X (というもの)」という、言語調査の現場で排除しにくい意味では、むしろ必ず二つの音調句に分かれるといってもよい。収集した連体指示詞の木部データ<60>-<67>には、このような、やや特殊な文脈での二つの音調句に分かれたものが混入しており、ひとつの句音調の、限定修飾であると解釈できそうなデータは、名詞が単音節となる B 型「歯」「こと」、A 型「と (準体助詞「の」)」の 3 種だけである。

あくまで限定修飾用法の、単一の音調句をなす場合のデータのみを収集するためには、「あの X とこの X」のような対比的な文脈や、「どの X」のような限定修飾用法しかもたない不定指示詞を用いた例を求める、という工夫が考えられるのであるが、その点、木部の調査データで気になるのは、ドン「どの」、ドゲナ「どんな」がコソアド系列の中に一括されていて、データの点でも区別がない点である。通常の疑問の発話ではたとえば、{[ド]ン} {[ハ]ー} 「どの葉」のような音調は不自然だと考えられるが、コソアドで一括してしまうと、パラダイム的な効果で類推がはたらきやすい、ということかもしれない。

木部氏は、続いて A 型と B 型にわけてデータの解釈にうつる。

A 型では、常に現れる<下降>“]”に加えて、これに先立つ<上昇>“[”が考察される。木部データでは、この“[”が現れないように見える場合は、高く終わる B 型の直後に予想される、1・2 音節の A 型語頭の“[”だけであることから、木部氏はこの“[”が A 型固有の弁別特徴であるとする。しかし、非文とされている<15'>や<27'>も、文脈によっては自然である。

13. ((タスキヨリ [ワ])) {オッ [ガ] | ナガ]カ} (襷よりは帯が長い) =<15'>

14. ((マ [チツ]ト)) {ハ [ヨ] | アル]エ} (もう少し早く洗え) =<27'>

いずれも前分に情報の焦点があり、後分に焦点がない場合である。文脈がない二文節だけを提示する調査では、原則として両方に焦点のある、つまり、文節それぞれが単独で句を構成するようなデータが現れやすいため、このような、句頭以外の位置でのデータは得にくい。

<15>, <27>のオッガ]、ハヨ]のような B 型のデータでは、単独では観察できない B 型末音節の後の“]”が正しく観察されている。しかし、分析ではこの“]”はピッチの自然下降として非弁別的であるとされる。根拠は、この“]”が実現しないデータがあることである。これは、後続するのが 2 音節の A 型アクセント単位の場合で、この場合、先行する B 型末尾の“]”は現れず、A 型頭音節の“[”のほうが実現する。優先されるのは弁別的な特徴である、という前提にたてば、A 型頭音節の“[”が弁別特徴で、B 型末音節の後の“]”は非弁別的、とするのは筋が通っている。

15a. カモ [ガ [ト]ーツ = <05>

15b. ハナ [ガ [セ]チョツ = <06>

しかし、ここで注意しなければならないのは、弁別的な特徴であっても、句音調の境界を越えて音調を実現することはできないのではないか、という点である。たとえば、川上(1953)の「花高し」と「鼻高し」は、東京方言の尾高型名詞(花)の核が次のアクセント単位の頭音節に実現する例としてよく知られるが、この場合でも、二つのアクセント単位は一つの句を構成していると考えられる。16のように、一旦句の境界、つまりピッチの上昇がはいてしまうと、少なくとも2番目のアクセント単位の音調によって16aと16bを区別することはできない。

16a. {鼻}、{高かったです}

16b. {花}、{高かったです}

鹿児島市方言の分析においても、A型頭音節の“[”が新たな句の開始を示しているのであれば、その前の“]”が実現しないことがありうるはずであり、“]”が非弁別的だと言うためには<05>や<06>が一つの句を成していることをまず示さなければならないのである。母語話者の直観では、木部データでA型頭音節の“[”が前のB型末尾の“]”を消去しているように見える組み合わせでは、いずれも句の統合・不統合の両方が可能な例であり、あげられたデータのほかに、B型末尾の“]”が残り、(情報の焦点のない)A型の語の頭音節の“[”が消えるもうひとつの音調実現形が可能である。

15c. ( {コンド [ワ]} ) {カモ [ガ] | | トツ} 「今度は鴨が飛ぶ」 cf. 15a

15d. ( {ソ [ケ]} ) {ハナ [ガ] | セ | | チョツ} 「そこに花が咲いている」 cf. 15b

こちらのほうが句内での位置による変異形を示しているとすれば、弁別的なのはB型の“]”ということになるはずである。あげられたデータについては、単に句末尾でB型の“]”が下げ核として実現しない、という、1アクセント単位単独の場合と共通する現象が観察されているということにならないだろうか。

B型末尾の“]”が消去された場合も残る末音節の前の“[”については、A型の場合と同様にB型でも弁別特徴としているが、この点についても検討が必要である。もしも“[”が、句内の最初のアクセント単位のマーカーであるとすれば、A型・B型を問わず単独の場合を含む最初のアクセント単位に分布しているのは当然なのである。むしろ、第2要素で“[”が現れていない場合のほうが検討に値すると思われるが、実際に木部データにもこの形がかなり現れている。

アツ「ある」<03> <07> ; フツ「降る」<08> ; ノン「飲む」<20> ;



ス「巢」<29> ; モン「者」<45> ; コッ「事」<55> ; ハ「齒」<62> ;

後ろの文節の語が以上のようにすべて単音節であり、かつ、動詞アッについては、終助詞が後続する場合に[アッ]の形をとるデータ (<80>, <81>, <82>) があるため、木部氏は、「一音節の中では十分に<上昇>させることが難しいから」と説明している。しかし、そうだとすれば、B型の後分が単音節で助詞を伴わないにもかかわらず“[”が現れているデータ <79> コ[ケ[ケ「ここに来い」は説明がつかないことになる。<79>の後分の[ケは、<上昇>というより全体のピッチが高いのが自然な発話であり、これが正確に記録されていると母語話者の立場から判断できる。このデータの組み合わせでは、前分の「ここに」が、後分の動詞「来る」の帰着点を指示する補語となっているが、通常の発話ではこの補語は他の帰着点と対立して限定する働きをもたないため、命令形でもある後分の動詞が独立した音調句をなしやすく、このために“[”が現れるのである。同じ動詞形でも、以下のような何らかの限定の加わる文脈では単独で句を構成せず、低い音調を取る。

17a. (指差しを伴って) {コ[ケ | ケ]} 「(今指差している) ここに来い」

17b. {ハシッ[テ | ケ]} 「走って来い」

一方、終助詞を伴うために上昇できるとされる<80> ソ[ケ [アッ] ガ「そこにあるだろう」、<82> [アシ]ケ[アッ] ガ「あそこにあるだろう」も、動詞の意味が補語による限定を受けないことによる二句構造だと考えた方がよい。データでは同じ二句構造となっている<81>ド[ケ [アッ] トカ「どこにあるのか」は、限定のための補語を求める疑問文であり、自然な発話なら助詞があってもやはり一つの句にまとまる。

18. {ド[ケ | アッ] | ト} 「どこにあるの」

このような、単音節の“[”を伴わない後分のデータは、B型だけでなくA型にもいくつかある。<42> [ア]ケ ボシ「赤い帽子」<47>ア[エ] ボシ「青い帽子」(傍点部は無声拍)のほか、形式名詞ト「の」が連体修飾されている形のデータがすべて後分に“[”を伴わない形である。これらも、B型の場合と同様に、明らかに限定修飾構造にともなう句への統合の例とみられる。形式名詞のトは、必ず連体修飾語の限定を受けるはずであり、したがって独立した句を構成して“[”を伴うことがない<sup>4)</sup>。

なお、これらの“[”を伴わないデータでは、A型とされているにもかかわらず、弁別特徴であるはずの“]”も表記されておらず、この結果、後分の“[”を伴わない単音節のアクセント単位ではA型とB型が弁別されていないように見える。この点の解釈について木部氏は触れていないのであるが、この判断の保留は理解できる。母語話者の立場からみても、単音節アクセント単位の句内のこの位置での型の弁別は、きわめて微妙である。発話

に際しては区別しているという意識があるのであるが、聞き分けの点では型の弁別よりはおそらく文脈によるところが大きいと感じられるからである。この点について少しくわしく述べる。

鹿児島方言の単音節アクセント単位の弁別は、A型では下降調、B型では非下降調の声調によることが知られている。句音調“[”が先行する場合、つまり、単独の発話や句の初頭位置ではこの声調の違いは明確である。A型の下降の幅は大きく、かつ、しばしば短母音が延長される。木部氏の表記ではこのような下降調単音節に、核と長音符を組み合わせた“]ー”（例：[ハ]ー「葉」、[ト]ーッ「飛ぶ」）が使用されているのはこの点を考慮したものと思われる。長音符が1モーラ分の長さ、という意味ではない。

19a. {[ ]ヒ}「日」、{[ ]ハ}「葉」

19b. {[ヒ]}「火」、{[ハ]}「歯」

しかし、句音調による上昇のない位置での低い下降調では、このような母音の延伸はなく、音節内部での下降の幅も小さいため、下降しないB型との差は小さくなる。型の対立自体が失われるわけではないのは、次のようなミニマルペアが存在することからも明らかである。

20a. {フ[ロン] | ]ヒ} 「風呂の日」

20b. {フ[ロン] | ヒ} 「風呂の火」

21a. {[ウイ]タ | ]ハ} 「浮いた葉」

21b. {[ウイ]タ | ハ} 「浮いた歯」

20aのヒ、21aのハは、20b, 21bと比べれば、明らかに低いことがわかる。しかし、いずれも低いこれらのピッチの違いを、通常の発話の流れの中でどのように聞き分けているかを説明することはむずかしい。次の例のように、さらに句が長くなり核の数が増えると、核の前後の下げ幅も小さくなるためなおさらである。

22a. {[ウ]ラン | ]キ | ジャ} ガ 「売らない気だろう」

22b. {[ウ]ラン | キ | ジャ} ガ 「売らない木だろう」

23a. {ホ[ラン] | ]キ | ジャ} ガ 「掘らない気だろう」

23b. {ホ[ラン] | キ | ジャ} ガ 「掘らない木だろう」

単音節語に限らず、{[ア]ケ | ハ]ナ}「赤い鼻」、{[ア]ケ | ハナ]}「赤い花」のような対立でも、句音調の伴わない位置での型の区別は、A型の核の前後でのピッチ下降が小さいために聞き取りにくい。このために、アクセント調査に協力的な資料提供者は、自然な発話かどうかに関わらず、各アクセント単位をそれぞれ句に区切った形で、つまり句音調で

あるピッチ上昇を加えて答えてしまうということが予想される。さらに、言語調査の現場で起こりそうな文脈の介入もある。「～と（言います）」の形で回答に現れやすい引用の助詞ト、テ、チ「と」の影響である。この助詞は、鹿児島市方言では型の弁別には影響しないが、引用内容を言語形式として直接伝える場合には、直前のアクセント単位を句として独立させることが多いようである。このために、言い切りでは句に統合するのが自然な連文節でも、引用形での回答をそのままデータとして採用すると、二句構造と同形になってしまう。

24a. {ナガ[レツ] | キモシタ} 「流れてきました」 cf. <91>

24b. {ナガ[レツ]} {キモシ[タ] | | テ | イー} マス 『『流れてきました』と言います』

25a. {ド[ケ] | アッ} | | ト } カ 「どこにあるのか」 cf. <81>

25b. {ド[ケ]} {[アッ] | | トカ | | テ | イー} マス 『『どこにあるのか』と言います』

25c. {ド[ケ] | アッ} | | テ | ユー } タ | | ト } 「どこにあると言ったの」(疑問文)

以上のように、木部データの連文節は、二句構造をもち後分に“[”が現れる場合と、一つの句に統合されて後分に“[”が現れない場合が混在し、双方が可能な場合でも一方だけが記録されている、とみることができるのである。解釈においても、句音調が存在しそれによって音調の実現が影響されること、および、二句構造の境界を越えて実現しない弁別特徴があることが考慮されておらず、このために、そうでない場合の解釈と食い違うことになっている。

句音調を考慮すると、鹿児島市方言のアクセントはこの章の冒頭で述べた母語話者の直観にほぼ沿って、以下のように分析されるはずである。

## 26. 鹿児島方言アクセントの分析

A型アクセント単位 }○/: 末音節の前に下げ核

B型アクセント単位 ○]/: 末音節の後に下げ核

句音調 { \* [●: 句の最初の下げ核の直前に上げ核

(●は句の最初の下げ核の前に音節があればこの音節、なければ下げ核自身)

句音調以外の点での木部氏の分析との違いは、B型末尾の下げ核を非弁別的な自然下降ではなく弁別の特徴とする点である。この型の弁別に関する結論自体は、簡単な連文節データを根拠にした「アクセントのタキ」論の金田一(1956)と同じである<sup>5)</sup>。しかし、母語話者としての印象では、鹿児島市方言での下げ核は、次の音節を積極的に下げるといよりは、むしろ、核の前まで自然下降に逆らってピッチの高さを保つように感じられ、その意味では句音調を伴わない句の末尾位置でも実現形に影響を及ぼしていると言えそうであ

る(20b, 21b 参照)。

句音調を伴うアクセント単位の実現形を卓立形、伴わない実現形を非卓立形と呼ぶことにすると、卓立形と非卓立形の型の区別はそれぞれ以下のようになる。

27. 鹿児島方言のアクセント単位

A型卓立形 /(\*) [(O)]O/ B型卓立形 /(\*) [O]/

A型非卓立形 /(\*) ]O/ B型非卓立形 /(\*) O]/

音調句は、鹿児島方言では卓立形にはじまり、任意の数の非卓立形が後続するまとまりということになる。卓立形を基本的な形とみれば、非卓立形は「アクセントを弱めて読む場合」にあたることになろう。しかし、準体助詞の]トや形式名詞の]ホー(A)「方」のように、非卓立形のみをもつ語もあるし、不定指示詞のようにほぼ常に卓立形で現れるものもあり、一方から他方が発生しているというような見方は必ずしもできない。

それぞれの句の中のアクセント単位がどのように区切られるかは付属語や複合語を中心として方言差があることが知られているし、また、たとえば東京方言に見られるような、「日が」(ヒ[ガ/ヒ]ガ)、「人」(ヒ[ト/ヒト])のように、卓立形・非卓立形で型が変わる語が見当たらない、といった違いはあるものの、それぞれの型で句音調を伴うアクセント単位と伴わない単位の実現形が区別され、かつ伴うものが句の先頭に立つ、という点では、鹿児島市方言のような二型アクセントも、東京方言と共通の音韻的特徴をもっているといえる<sup>6)</sup>。また、このような句音調(卓立形/非卓立形)の分布でも、少なくとも構文レベルでは、冒頭であげた郡(1997)の基準でおおまかに説明がつきそうな対応を示す。

東京方言のアクセント体系と九州の二型アクセント体系が系統的には日本語アクセントの中で決して近いとはいえない関係であることを考え合わせると、このことは、各方言の句音調体系が日本祖語のアクセント体系まで遡りうる可能性があることを示すものであるという見方もできるだろう。

### § 3. 鹿児島市方言の音調句の分布

前章では、体言・用言の限定修飾構造を明示的に示される場合を中心に、複数のアクセント単位の音調句への統合が、統合しない構造(二句構造)と対立することについて述べた。鹿児島方言での音調句への統合は、このような構文論(文の構成論)に関わるレベル以外の音調の実現においても観察される。

音調句への統合は、形態素の連続がある形式的なまとまりを構成することを表示する一つの構造であると考えられるが、同種の構造として、鹿児島方言には平山輝男氏が「一般

複合法則」と名づけた、アクセント単位への統合がよく知られている。典型的には助詞や助動詞などの付属語の接続や、複合語の派生において観察される、連続する最初の形態素によって決定される型（A型かB型）の、ひとつのアクセント単位として複数の形態素がまとまる構造である。ほとんどの付属語は単独でアクセント単位を構成することができず、この結果、鹿児島方言のアクセント体系の記述は日本語の他の方言に比べて著しく単純になる。

本章では、この「一般複合法則」の交替形として句への統合や二句構造が観察される場合を中心に記述する。

### § 3-1. 複合語と音調句

鹿児島方言の複合語アクセントが統一的に一般複合法則で記述されることはよく知られている。たとえば、「黒豚」「黒ざとう」「黒シャツ」「黒帯」「黒山」「くろじょか」「黒さ」は「黒い」と同様にB型、「ひんまがる」「ひっとれる」「ひっとでる」「ひんなる」「ひん寝る」「ひっちゃれる」は「引く」と同様にA型のそれぞれ1アクセント単位となり、二番目の成分の型がどうであるか、そもそも二番目の成分が語であると認識できるどうかには関わらない。しかし、漢語や外来語を成分とするものを中心とした、それぞれの成分がまだある程度の自立性を保っている複合語の一部では、この複合語アクセントの適用は任意となる。たとえば、「日本語情報処理」ならば、以下の三つの音調が可能である。

28a. /ニホンゴジョーホーショリ/ cf. /ニホン/

28b. {ニホン[ゴ] | ジョーホーショリ} cf. /ジョー]ホー/

28c. {ニホンゴジョー[ホー]} {[ショリ]}

28aは一般複合法則によるアクセント単位、28bは2アクセント単位の統合句、28cは2アクセント単位の2句構造である。このいずれの形が可能かは、語彙によって異なる。たとえば、「熊本大学」は必ず1アクセント単位として統合するが、「熊本県立大学」は1アクセント単位の語形と{クマ[モ]ト | ケンリツダイガク}のような句までの統合が可能である。3つ以上の成分をもつ場合にこのようなアクセント単位の分割がおきやすいが、「天下泰平」や「余裕綽々」「奇奇怪怪」「危機一髪」「森羅万象」といった四文字熟語ではアクセント単位・句とも分割されやすい<sup>7)</sup>。28cのような二句構造は、典型的には後分が動詞的な語の場合に現れ、たとえば、{ニホンゴジョー[ホー]} {ショリ[チュー]ノ | エ]ラー} や {ニホン[ゴ]} {オンセー[ジョー]ホー} {ショリ[ヨー]ノ | キ]キ} のように、格助詞がない点を除けばほぼ構文レベルでの動詞句と同様の構成をもち、音調句への分割もこれと

ほぼ並行的にみえるのであるが、ただし、これらも一般複合法則にしたがう形と交替する。

29a. {ニホンゴジョーホーショリチュー[ノ] | エ}ラー}

29b. {ニホンゴオンセージョーホーショリヨー[ノ] | キ}キ}

l アクセント単位に統合する形は、非卓立形の位置ではもっとも自然である。

30a. {コー[カ]ナ | ニホンゴジョーホーショリヨーノ | キ}キ}

「高価な日本語情報処理用の機器」

30b. ? {コー[カ]ナ | ニホンゴジョーホー | ショリヨーノ | キ}キ}

30c. \* {コー[カ]ナ | ニホンゴジョーホー} {ショリ[ヨー]ノ | キ}キ}

30d. {コー[カ]ナ} {ニホンゴジョー[ホー]} {ショリ[ヨー]ノ | キ}キ}

このように、アクセント単位への統合が起きない複合語形は、卓立形の実現パターンの変異形とみることでもできる。以下では、さらに、アクセント単位への統合が起きる語形を原則としてもたないタイプの複合語をいくつかあげる。

### § 3-1-1. 等位構造

X・Yのような二項（以上）から成り、XとYの交換が（少なくとも意味上は）可能な構造の複合語を等位構造と呼ぶ。もっとも簡単な形は、{ヒダ[リ]} {[ミ]ギ} = {[ミ]ギ} {ヒダ[リ]}、{イ[ヌ]} {ネ[コ]} = {ネ[コ]} {イ[ヌ]} のタイプの並列で、この場合、単なる二語の並置とはほぼ同形にみえ、また意味の点でも、/イヌネコ/のようにlアクセント単位に統合してしばしば語順が固定した語と比べて、透明性が保たれている。

このような等位構造は、一般複合構造や句への統合が起きる構造の中でも二句構造をたもつ。後分は、後続の形態素とアクセント単位または句として統合して卓立形をとる。

31a. {ア[ジア]} {アフ[リ]カ} 「アジアアフリカ」

31b. {ア[ジア]} {アフリ[カ]ノ} 「アジアアフリカの」

31c. {ア[ジア]} {アフリカショ[コ]ク} 「アジアアフリカ諸国」

31d. {ア[ジア]} {アフリカショコ[ク]ミン} 「アジアアフリカ諸国民」

31e. {ア[ジア]} {アフ[リ]カ | ゲンゴケン} キュー 「アジアアフリカ言語研究」

前分は、前後の形態素と統合せず、句としての独立を維持する。このため、等位構造をもつ複合語は非卓立形をとらない。

32a. {[ダイ]ノ} {[ジュー]ショ} {[シ]メー} ナ 「誰の住所氏名ですか」

32b. {ナイ[ノ]} {[イ]ジ} {カンリ[ヒ]} ナ 「何の維持管理費ですか」

## § 3-1-2. 桁構造

等位構造と異なり、順序にも意味があり固定しているが、姓名の連続のように、それぞれの成分はお互いに独立していて、部分の総和としてしか全体の意味が決められないような構造を桁構造と呼ぶことにする。この場合も、各成分はそれぞれに句を構成して統合しない。代表的なのは数詞で、各桁ごとに独立した句を成す。

33a. { [ヨ]ンセ} {サン[ビ]ャク} { [ニ]ジュ} { [イ]ッカイ} 「4321回」

33b. { [ ]サン | ]テン} { [イ]チ} { [ ]ヨ} 「3.14」

33c. { [セ]ッシ} {ゴ[ジュ]} {ニ[ド]} 「摂氏 52度」

ただし、11~19の整数は1アクセント単位に統合し、{ジュ[イチ]}、{ジュ- [ニ]}、{ジュ- [サン]}、{ [ジュ- ]シ} ~ { [ジュ- ]ヨ}、{ [ジュ- ]ゴ}、{ジュ [ロク]}、{ジュシ [チ]}、{ジュ [ハチ]}、{ [ジュ- ]ク} のように、一般複合法則の例外を成す。ジュ-「十」はB型であるので、例外になっている14, 15, 19は、{ [ジュ- ] | ]ヨ}、{ [ジュ- ] | ]ゴ}、{ [ジュ- ] | ]ク} のような2アクセント単位から成る句のようにも見えるが、助数詞が後続する場合はA型のアクセント単位に統合する。九九の読み上げのような数詞の連続でも、左辺部分は数値に関わらず常にA型の1アクセント単位に統合する。

数詞に先行する接頭辞「第」は、一桁の数詞に先行する場合も含め、ほぼ常に独立する。「第一」「第二」は、「第一に」のような副詞形では二句構造を成すのに対し、複合語の前分となるときは後分とともにB型のアクセント単位となるが、これが唯一の例外であると考えられる。次の例では、ほぼ同じ意味であっても接頭辞の有無によって句への統合の可否が分かれている。

34a. {ドラ[マ]ノ | ]サンカイ}メ} 「ドラマの三回目」

34b. {ドラ[マ]ノ} { [ダイ]} { [サン]カイ} 「ドラマの第三回」

35a. { [ダイ]} {ニ[ジ] | タイ]セン} ~ { [ダイ]} {ニジタイ[セン]}  
「第二次大戦」

35b. { [ダイ]} { [サン]ジ | セカイタイ]セン} 「第三次世界大戦」

## § 3-1-3. 限定接頭辞

名詞接頭辞の中には、通常独立して卓立形のみをとるものがある。[ ]ゼン (前、全)、[ ]リョ- (両)、[ ]ゲン (現、元)、[ ]ハン (反)、[ ]キュー (旧)、[ ]ハン (半)、モ[ ]ト (元)、[ ]ヒ (非)、[ ]セ- (聖) などが、自立性の高い名詞に接続して意味的な透明度の高い複合

語を構成する場合である。後続の名詞と句を構成するか、あるいは、二句構造をなす。二つの構造の間の差は不明瞭である。

36a. {[ブツ]シュ} {モ[ト]} {ダイトー[リョー]} 「ブッシュ元大統領」

36b. {[ブツ]シュ} {モ[ト] | ダイトーリョー]} =36a.

接頭辞]マ(真)が方向・方位を表わす名詞に接続する場合は、二句構造をとるか1アクセント単位に統合するかのいずれかであり、非卓立形ではA型アクセント単位に統合した形のみが可能である。

37a. {[マ]} {[ウ]エ} 「真上」

37b. {サクラジ[マ]ノ} {[マ]} {[ム]カイ} 「桜島の真向かい」

37c. {サクラジ[マ]ノ} {マ[ム]カイ} =37b.

37d. {サクラジ[マ]ノ | マム]カイ} =37b.

ナナメ]や方向・方位を修飾する位置のヒダリ]・ミ]ギなども同様な分布になるが、非卓立形では、|ナナメ] | マエ]} のように2単位を維持した形も可能であるという点で異なる。

### § 3-2. 限定修飾以外の連文節の統合

第2章で述べたように、連文節構造は、句に統合する場合と二句構造を成す場合がある。句への統合は、2個以上のアクセント単位の間限定修飾関係が(累加的に)適用される場合である。

38a. {[ア]カイ | ハナ]ノ | トナ]カイ} 「((赤い鼻の) トナカイ)」

38b. {オ[ス]ノ | ワカイ] | トナ]カイ} 「(オスの(若いトナカイ))」

ただし、限定修飾関係があれば必ず句に統合するわけではない。たとえば38bは、ワカイ]の前後にフォーカスのおかれる語が介在すると、複数の句に分割される。卓立形の語が後続する場合には、その前の直接の構造を成さない句はすべて卓立形となる。

39a. {オ[ス]ノ} {[モツ]ト | ワカイ] | トナ]カイ} 「オスのもっと若いトナカイ」

39b. {オ[ス]ノ} {ワカ[ク]} {[ナイ] | トナ]カイ} 「オスの若くないトナカイ」

また、限定修飾されたアクセント単位に統合して卓立形にすることによりフォーカスを実現する語もある。限定の副助詞<sup>8)</sup>や動詞活用形などの付属語は、このような形をとるのが多い。

40a. {シ[ロイ] | ハナガ] | アツマッタ]} 「白い花が集まった」

40b. {シ[ロイ]} {ハナバツ[カイ] | アツマッタ]} 「白い花ばかり集まった」



- 41a. {シ<sup>・</sup>クダイ[ガ] | オワッ<sup>・</sup>タ | コド}モ} 「宿題が終わった子供」  
 41b. {シ<sup>・</sup>クダイ[ガ]} {オ[ワ]ラン | コド}モ} 「宿題が終わらない子供」  
 41c. {シ<sup>・</sup>クダイ[ガ]} {オワッタ[バツ]カイ} 「宿題が終わったばかり」

つまり、限定修飾関係にある連文節は、句に統合する場合としない場合の二つの実現形をもちうるわけである。では、限定修飾以外の関係にある連文節は句に統合することはないのだろうか。

### § 3-2-1. 等位構造

郡(1997)は、東京方言で句への統合が起きる場合として、「③ 並列されていて、直前の語と意味的に一体化している語」を挙げている。先行文脈により指示対象が特定化された「男と女」のような場合である。このような場合を除けば、二項が交換可能な構文レベルでの等位構造の音調は、句に統合しないのが基本であると考えられ、この点では鹿児島方言もほぼ同様である。

- 42a. {ドコ[デ]} {パンヤ} {ギューニュー[ガ] | | ウッ | | チョッ}  
 「どこでパンや牛乳を売っている」  
 42b. {ミセ[ノ]} {ミギテ[ニ]モ} {ヒダイテニ[モ] | タバコヤガ | アッ}  
 「店の右手にも左手にもタバコ屋がある」  
 42c. {イン[ド]ニ} {[イ]ク} {マエ[モ]} {イッテカ[ラ]モ | シラセンジャッ}タ  
 「インドに行く前も行ってからも知らせなかった」  
 42d. {[トン]ダイ} {ハネ[タイ] | シ}チャ} {ナ[ラン]}  
 「跳んだり跳ねたりしてはいけない」

これらが句に統合する場合、アクセント単位は維持される場合と、アクセント単位も統合する場合の二つに分けられ、いずれも条件が限られている。

アクセント単位の境界を維持したまま句に統合するのは、並列の格助詞トで接続された名詞に限られるようである。統合できるのは、1アクセント単位ずつ並列されている場合であり、複数のアクセント単位から成る句が並列されるときは、それぞれの間に句の境界がなければならない。

- 43a. {ミ[ギ]ト} {ヒダ[リ]} 「右と左」  
 43b. {イチバン[ト] | ニバント | サンバンデ} { [ドイ]ガ | スキ } ナ  
 「一番と二番と三番でどれが好き」  
 43c. {ヒダイ[ト] | ミギ}ノ} {メ[ノ]} {オーキ[サ]ガ | チ}ゴ}

「左と右の目の大きさが違う」

43d. {ヒダイ[ノ] | メト} {ミ[ギ]ノ | メノ} {オーキ[サ]ガ | チ}ゴ}

「左の目と右の目の大きさが違う」

一般複合規則に従ってアクセント単位に統合するのも1対1で並列する文節に限られる。また、かなり語彙化していることもうかがわれ、たとえば動詞句の統合する44aは名詞としても用いられる。

44a. {[ヤッ]タイ} {トッ[タイ]} =/ヤッタイトッ]タイ/ 「やったりとったり」

44b. {キ[テン]} {コン[デン]} =/キテンコンデン]/ 「来ても来なくても」

44c. {ネコ[モ]} {シャク[シ]モ} =/ネコモシャクシモ/ 「猫も杓子も」

44d. {ドーニ[モ]} {コー[ニ]モ} =/ドーニモコーニモ/ 「どうにもこうにも」

44dのタイプは、ナイデンカイデン「何でもかんでも」のように後分に無意味語をもつような重複構造では、二句構造をもたず常に1アクセント単位に統合し、事実上複合語となっている。

### § 3-2-2. 「独立する付属語」

この章の冒頭で述べたように、鹿児島方言の二型アクセント体系ではほとんどの付属語が単独でアクセント単位を構成できないのであるが、その例外として前のアクセント単位に編入されない助詞や助動詞が、「独立する付属語」として記述の対象になってきた。実は、これらの付属語も、何らかのフォーカスのおかれる環境にない限りは、音調句としては前のアクセント単位と統合するものが多い。限定修飾構造以外でもっとも頻繁に句への統合が起きるのが、このような付属語接続である。注意が必要なのは、これらの付属語が「非卓立形のアクセント単位」であるとすれば、やはりA型あるいはB型への型の所属が決定できるはずである、という点である。本稿では、母語話者の直観を活かし、これらの付属語がどのような型であるかを決定することを試みる。いわゆる「独立する付属語」のうち、アクセント体系とは異なるイントネーションによってピッチが決定している可能性のある終助詞や間投助詞を除き、列挙していく。

#### A. 助詞

- ・接続助詞 ]シ「し」 {ミ[タ] | ]シ} {[キー]タ | ]シ} 「見たし聞いたし」
- ・準体助詞 ]ト「の」 {タ[ケ] | ]ト} {モ | コー]タ | ]ト} 「高いのも買ったの」
- ・接続助詞 ]テ「のに」 {コ[ケ]} {アッ[タ] | ]テ} 「ここにあったのに」
- ・(借用形の接続助詞) カ]ラ、ノ]デ、ノ]ニ、ケ]ド、ケレ]ド、ケレ]ド]モ

以上は、非卓立形しかもたない。さらに終助詞が後続しない位置で文末イントネーションによるピッチの変更が起きることがあるが、終助詞が接続すれば、後の音節が安定して低い。準体助詞以外は付属語を伴って長いアクセント単位を構成することがないが、ピッチによりA型と判定できる。(20. 21.を参照)

・引用助詞 ]ト・]テ・]チ {ミ[タ] | ]テ} {シラン[ジャッ]タ} 「見たと知らなかった」

副助詞ワ、モが後続する場合や、ワと融合したタは、前のアクセント単位に統合する。後続の動詞]ユ「言う」オモ「思う」と融合した形、]チュー、]チョモは、後続の動詞の型を引き継ぐ。本来は型を持たない付属語であった可能性がある。

## B. 用言派生語尾

・動詞派生 ]スッ「する」

漢語名詞や副詞、動詞の〜タリ形、〜ヨー形(「〜ようとする」、連用形+ワ/モに接続する場合。通常は句に統合するが、後続の形態素にフォーカスがある場合には句としても独立する。

- 46a. {[サン]カ | ]スッ} 「参加する」  
 46b. {[サン]カ} {[ ]スッ} ド 「参加するぞ」  
 46c. {[サン]カ} {[ ]セン} 「参加しない」(平叙文)  
 46d. {[サン]カ | ]セン} 「参加しない」(疑問文)  
 46e. {[サン]カ} {[シ]ヤ | ]セン} 「参加しはしない」(疑問文)

・指定助動詞/形容動詞派生 ジャ]「だ」および借用形ダ、デス]

名詞や形容動詞語幹に接続。借用助動詞ヨー(ダ)、ソー(ダ)(様態・伝聞)のダ・デスもこれに順ずる。活用形のうち、連用形デ、ニ、連体形ナ、仮定形ナラは前のアクセント単位に編入される。これ以外の独立する形は、単独で「そうである」という意味の動詞の活用形としても機能し、この場合は卓立形をとる。通常は句に統合するが、後続の形態素にフォーカスがある場合には句としても独立する。

- 47a. {ハン[タイ] | ジャッタ} 「反対だった」  
 47b. {ハン[タイ]} {[ジャッ] | ]ハッ | ジャ} 「反対であるはずだ」

・推定助動詞/形容詞派生 ラ]シ「らしい」

独立せず、前のアクセント単位に編入するが、推定の意味では非卓立形のアクセント単位となることがある。句として独立することはない。

- 48a. {[タイ]ヘン | オトコラシー} 「たいへん男らしい」  
 48b. {ドー[モ]} {[タイ[ヘン]ナ | オトコラシー]} 「どうも大変な男らしい」

48c. {ドー[モ]} {タイ[ヘン]ナ|オトコ|ラ}シ} ド 「どうも大変な男らしいぞ」  
 なお、借用形の助動詞語幹]ヨー、ミ]タイも、ラ]シと同様に、前のアクセント単位に編入するか句としてのみ統合するかに揺れがある。様態のソーはつねに前のアクセント単位に統合し、伝聞の]ソーはつねに非卓立形で句に統合する。

### C. 補助動詞構文

鹿児島方言では、動詞活用形に直接接続する助動詞構文や複合動詞はほぼすべて一般複合規則に従い単一のアクセント単位を構成する。いわゆる「独立する付属語」は、動詞に助詞・助動詞が付属したものに補助動詞が接続したものであり、句に統合し、さらに母音の脱落で形態の境界が曖昧になった場合でも、後分が本来の動詞の型の弁別を保っている場合が多い。

・～ゴト+アッ]／ナカ]（「ように」+「ある／ない」<sup>9)</sup>

動詞の意思形（～ヨー）に接続して願望構文、連体修飾を受けて様態構文を構成する。肯定形ゴ|タ(ッ)]、願望形は否定形ゴト|ナカ]（副助詞を伴ってゴタ|ナカ]、ゴチャ|ナカ]）。アクセント単位の境界の前は、前のアクセント単位に編入される。肯定形はほぼ常に非卓立形。否定形のナカ]は、平叙文では卓立形をとることが多い。

- 49a. {イ[カン]ゴ|タ]} 「行かないようだ」  
 49b. {オト[コン][ゴ|タ]} 「男のようだ」  
 49c. {イ[コ]ゴ|タ]} ~ {[イッ]ゴ|タ]} 「行きたい」  
 49d. {イッ[ゴ]チャ]} {ナカッ[タ]} 「行きたくなかった」

名詞+ノの接続する様態構文では、ゴが単一の非卓立形アクセント単位を構成する実現形との間で揺れがあるが、これは、]ヨー|ダ]の干渉による世代方言である可能性がある。

- 50a. {オト[コン]|ゴ|タ]} =49b  
 50b. {オト[コン]|ゴ|タッタ]} 「男のようだった」

この場合でもゴ] |タ]は卓立形をとることはない。

・～ゴト+]スッ]／ナッ]（「ように」+「する／なる」）

ゴ|]スッ、ゴ|ナッ]の形で実現する。終助詞を伴わない終止形では句に統合するが、補助動詞の活用によっては独立することもある。

- 51a. {[カ]ぜ]} {ヒ[カン]ゴ|セン]ナ} 「風邪をひかないようにしないと」  
 51b. {イ[ケン]ゴ]} {ナラン[ナ]|ヨカイドン]} 「行けなくならなければいいけれど」

・～ん(ナ)+ナラン]（「なければ」+「ならない」）

義務構文。ナラン]は必ず非卓立形で現れる。

52. {ドシ[テン]} {[イ]カン|ナラン|ト} ケ

「どうしても行かなきゃならないのか」

・動詞連用形+ガ/ワ/モ+ナッ]/ナラン]

可能構文。否定形のナラン]は終助詞を伴わない平叙文で非卓立形で現れるが、肯定形のナッ]は、通常は疑問文や自問文、あるいは仮定節に現れて卓立形をとる。

53a. {ドシ[テン]} {[イッ]ガ|ナラン]} 「どうしても行けない」

53b. {[イッ]ガ|ナラントキャ]} {[デン]ワ|スッ]デ}

「行けない時は電話するから」

53c. {[イッ]ガ} {ナラント[キャ]} {[デン]ワ|スッ]デ} =53b

53d. {[イッ]ガ} {ナッ[ド]} カ 「行けるだろうか」

53e. {[イッ]ガ} {ナレ[バ]} {[イッ|タイドン]}<sup>10)</sup> 「行けるなら行くんだけど」

53f. {[ヨー]} {[シ]ガ} {ナッ[タ]} ネ 「よくやれたね」

・連用音便形接続補助動詞

～テ/デに接続する形と動詞の接続による構文であるが、鹿児島方言ではこの接続助詞が音便を起こし、母音の後で促音化(ミッ|クルッ「見てくれる(ノ見てやる)」)、連用音便による子音の後で脱落(トッ|シ)モ「取ってしまう」、補助動詞の頭母音と結合(セ|)チョッ「咲いておる」といったさまざまな変化を起こし、分節音レベルでは統合が進んでいるように見える。しかし、アクセントに関する限り、これらの短縮形でもアクセント単位の境界を残して音調句としてのみ統合する実現形として解釈できる場合がほとんどである。アスペクト形式の]チョッ/]ジョッ「ている/でいる」を例に、このことをやや詳しく述べる。

]チョッ/]ジョッは、補助動詞の]オル「いる」の前に、母音の脱落した接続助詞が融合した形式で、接続助詞の直前にアクセント単位の境界をもつ。境界の前で、動詞は型の弁別を保ち、]チョッ/]ジョッは、終助詞を伴わない肯定平叙文でA型の非卓立形をとるが、活用形のフォーカスによってはA型の卓立形で実現する場合もある。

54a. {チャワン[ガ]} {[カ]ケ|チョッ]タ} 「茶碗がかけていた」

54b. {カギ[ワ]} {カ[ケ]|チョッ]タ} 「鍵はかけていた」

54c. {カギ[ワ]} {カ[ケ]} {[チョ]ラン} 「鍵はかけていない」(平叙文)

54d. {チャワン[ガ]} {[カ]ケ|チョ]ラン} 「茶碗がかけてない」(疑問文)

アクセント単位が、自立的な構文論上の「文節」とずれている、という点を除けば、通常のアクセント単位の句への統合と比べて特殊な点は認められない。ただ、境界の前後の

アクセント単位が単音節となり、型の識別がむずかしい場合がある、という問題がある。後分の]チョッ/]ジョッについては、非卓立形の単音節A型が、音節内での音調の下降よりはむしろ、核のあとでのピッチの相対的下降がB型と比べて大きいという点で区別される、ということ認めれば、この型に分類することは問題ないと思われる。55a と 55b のチョでは、55a のほうが明らかにピッチが低い。

55a. {[キッ] | ]チョッ} 「切っている」

55b. {[キッ] | チョモ} 「切ると思う」

前分の単音節卓立形の型の弁別は、母語話者にとってもはるかに困難な問題をはらんでいる。接続助詞の前の連用形が長い場合は、促音に終わる場合であってもある程度の有聲部の延伸が可能であり、A型の音節内部のピッチ下降の有無が確認しやすい。しかし、55b や 55c のように、短い単音節での弁別が何によっているかには精細な分析が必要だと思われる。大まかにいえば、]チョッと比べたときの相対的なピッチがB型のほうが高いように感じられるのであるが、最初からA型のピッチが低いのか、本来下降があるのに下った点のみを知覚しているのか、という問題が残る<sup>11)</sup>。55d のように、母音が無声化する環境では、型を弁別しているかどうかもわからない。55e では、]の前のチョッが、B型のほうがやや低いように感じられる。

55a. {[ウッ] | ]チョッ} 「売っている」 vs. {[ウッ] | ]チ'ョッ} 「打っている」

55b. {[ユ] | ]チョッ} 「言っている」 vs. {[ユ] | ]チョッ} 「結っている」

55c. {[ニ] | ]チョッ} 「似ている」 vs. {[ミ] | ]チョッ} 「見ている」

55d. {[シ] | ]チョッ} 「している」 vs. {[キ] | ]チョッ} 「来ている」

55e. {[シ | チョッ] タ} 「していた」 vs. {[キ | チョッ] タ} 「来ていた」

この補助動詞接続形がさらに句に統合したときは、56, 57 のような単音節の動詞語幹の非卓立形が観察される。先行するのがA型卓立形の場合には、A型動詞語幹の語頭の核が必ず実現されるので、かろうじて対立が維持される。アクセント単位の境界で自然下降を抑えることにより、少なくともB型動詞をA型と言い分けることは可能である(56a)。56bでは、無声拍に先行するタが下降調となる。しかし、B型の下げ核が先行する場合は、有聲部の短い動詞を卓立形にしないで言い分けるのは、母語話者でもほぼ不可能だと感じられる(57a)。ダでピッチが保たれた後の下降部が無声化している57bでは、ピッチ下降のない{マ[タシ] | ]チョッ | ]ト}「待たしてるの」ともほとんど音調の差が感じられない。57cのように語幹が完全に有聲で長い場合にのみ、わずかなピッチ下降の有無を言い分けることができる<sup>12)</sup>。

- 56a. {[マ]タ | ]ウツ | ]チョツ} 「また売っている」  
 vs. {[マ]タ | ウツ | ] ]チョツ} 「また打っている」
- 56b. {[マ]タ | ]シ | ]チョツ} 「またしている」  
 vs. {[マ]タ | キ | ] ]チョツ} 「また来ている」
- 57a. {マ[ダ] | ]ウツ | ]チョツ | ]ト} 「まだ売ってるの」  
 vs {マ[ダ] | ウツ | ] ]チョツ | ]ト} 「まだ打ってるの」(疑問文)
- 57b. {マ[ダ] | ]シ | ]チョツ | ]ト} 「まだしてるの」  
 vs {マ[ダ] | キ | ] ]チョツ | ]ト} 「まだ来てるの」(疑問文)
- 57c. {マ[ダ] | ]ヨン | ]ジョツ | ]ト} 「まだ呼んでるの」  
 vs {マ[ダ] | ヨン | ] ]ジョツ | ]ト} 「まだ読んでるの」(疑問文)

このように、前分で型の区別が一部中和している可能性があるものの、連用音便形接続補助動詞は一般的には2アクセント単位の句への統合であると分析できる。唯一の例外は、クレ/クイヤン「くれ/ください」に終わる命令形や、クレン「くれない」に終わる依頼形で、この場合、音便形で接続しているときに1アクセント単位となることがある。

- 58a. {ミ[テ] | ク]レ} 「見てください」 vs. {[シ]テ | ク]レ} 「してください」  
 58b. {ミック[レ]} 「見てください」 vs. {シッ[ク]レ} 「してください」

以上のように、鹿児島方言では補助動詞構文が、原則としてアクセント単位の統合を伴わずに音調句を統合した形をとることを述べた。このような句への統合は、後分が型の区別を維持し、フォーカス次第では句の統合を解除できる点で、アクセント単位の統合と異なっている。しかし、これらの構文の中には句が統合した形でしか現れないものもあり、機能的な差よりは歴史的な要因が関与している可能性も否定できない。他の二型アクセント方言でこれら2種類の統合がどんな分布を成すかを比較してみることも今後の課題であろう。

#### § 4. おわりに

本稿は、母語話者の直観に基づいて、1個以上のアクセント単位の統合する音韻論上の単位として、東京方言などとも共通する音調句が鹿児島方言にも存在することを示し、この音調句を考慮に入れた上で、二型アクセントである鹿児島方言のアクセントにおける型の弁別の構造や、アクセント単位の統合の仕組みを記述しなおすという試みである。母語のデータを利用することには、非母語話者の調査者よりも膨大な量のデータを簡単に手に

入れられること、これらのデータを利用することにより、意味・音形の微妙な違いの分析にも踏み込める、という利点がある。もちろん、マイナス面もあり、これらのデータやその可能な解釈を、観察者が恣意的に選択していないということを説得力をもって示すことが難しい、という問題もつきまとう。言語学者自らの提供するデータは信用されない。ただ、この負の側面については、オンラインジャーナルである本誌の性格上、音声データそのものを公開することも可能であることから、少なくとも、微妙なデータの音形自体については、非母語話者（および言語学の専門知識をもたない他の母語話者）が客観的に検証できるような手立ては講じられる、という見通しで本論文に着手した。

方言アクセント研究における音調句の分析の重要性は、上野(1984a)が早くに指摘したとおりである。個別のアクセント体系の共時的な解釈の重要な要素であるにとどまらず、日本語アクセントの歴史的な分化の解明にとっても、さまざまな問題（付属語のアクセントがどのように失われていったか、音調によって音調句しか表示しない一型アクセントがどのように発生したか、など）に関与してくる可能性がある。にもかかわらず、方言アクセントの句音調を正面から取り上げた研究は非常に少ないように感じられる。その一つの理由が、非母語話者である調査者にとっては困難が多い分野だからであるということは想像がつく。このことも、あえて母語の句音調を分析してみた動機のひとつである。

しかし、本稿は、母語話者でなければ音調句や句音調の分析ができないということを主張するつもりでは毛頭ない。むしろ逆に、非母語話者の立場で音調句を明らかにするためにはどのような調査を行う必要があるのかを明らかにしたい、という問題意識をもって、まず母語について検討してみたつもりである。調査者にとっての最初の困難は、何を調べるべきかが明らかでない、ということだからである。このために、木部氏の記述と解釈を俎上にあげる形になってしまったのは遺憾であるが、口数の多い資料提供者の発言として大目にみていただきたい。結果的に、鹿児島方言の音調句においても、少なくとも構文のレベルにおいては、東京方言の音調句の決定について報告されているものとよく似た原理が働いていることが示せたと考えており、また、このことは本稿のささやかな成果であると自負している。方言アクセントの音調句がほぼ共通の原理で決まっていると仮定できれば、音調句の調査のための調査項目がある程度設定しやすくなるはずである。機械的に大量の連文節項目を選定する代わりに、内部にフォーカスを決定するような文脈を含んだ連文節～たとえば、「あのXとこのX」～を調査項目として選定していくことにより、資料提供者から得られたデータが音調句の点でどのような構造をもつかを一意的に決定できる見込みが立てられると期待される。



また、面接調査の調査項目だけでなく、自然な談話の録音資料をできるだけ大量に確保し、このようなデータとの突き合わせを行う必要もあると思われる。音調句の分析とは、抽象化された型の弁別体系から、また一步、具体的な生の言語音のアクセントの「姿」に戻って捨象された特徴についての考察を深める手続きでもあるはずだからである。

## 注

- 1) 東京方言で助詞「の」は直前の名詞の最終拍後ろの下げ核(花 ハナ)]を消去するという独自アクセント的特徴をもつ語であるが、前の名詞とともにひとつのアクセント単位とする解釈をとった。これは単に議論を単純化するためであり、東京方言で助詞がアクセント単位であるかどうかというより一般的な問題についてはここでは踏み込まない。(ただし、{キョ]ートカラ]ノ}のような二重下降が現れうる構造の文節の存在は、助詞にアクセント単位を認める必要があることを示すようである。)
- 2) 連体副詞の木部データ<69>, <70>, <71>, <73>, <74>は、(連体副詞+用言+体言)という3文節の構成になっており、かつ、コゲン等の語形は連体指示詞とも同音異義であるため、句音調パターンの可能性がさらに複雑になるはずであるが、データではそれぞれ一例ずつである。たとえば、<73>は次の(1)の場合の音調のように思われる。(1) ( { [マッ]テ} ) { [コ]ゲン } { サン[カ] } { []ヒー } (詠嘆。「(まったく)こんな寒い日(に)・・・」) (2) { [コ]ゲン } { サン[カ] | ]ヒ } (「このような寒い日」) (3) { [コ]ゲン | サンカ | ]ヒ } ( { ハジ[メ]テ } ) (「こんなに寒い日ははじめて」)
- 3) 最初のヨカトコイは1アクセント単位でヨカトコイ[ニャ]、二つ目のヨカトコイは、ヨカにフォーカスがあるため2アクセント単位で一つの音調句 ヨ[カ]ト]コイとなると考えられる。『人間ショキチ物語』出水文化の会、1973。鹿児島県出水方言の文例である。
- 4) <77> ド[ケ イッ] トカ 「どこに行くのか」のイッ(A型)に上昇がないのは、おそらく高く終わるB型の後で消えている場合で、木部氏の表記法にしたがえば“[”が補われるべきところと思われる。これも筆者が自然だと感ずる発話では {ド[ケ] | ]イッ | ]ト} カ。なお、カのような文末詞は、低く接続する場合と高く接続する場合がある。このような文末イントネーションに関係すると見られるピッチの交替は、句音調の有無とは別種のものであるとみるべき可能性があるので、本論文では句の表記 { } の外側に置くことにする。文末詞の音調については木部(2000)参照。
- 5) 金田一(1956)は、薩摩半島南部の穎娃方言に関する記述である。対比してB型のタキのない方言として言及されている鹿児島県北部出水町方言の連文節データ、ハナガ[チ]ルは、二句構造が疑われる実現形であり、この論文も句音調をじゅうぶん考慮した分析であるとは言い難い。筆者の調査では、出水市方言の鹿児島市方言との違いは、句頭から核までの全体が上昇する句音調をもつことと、A型の

核が長い末音節を常に下降調で実現することの2点であり、B型末音節の後にもやはり下げ核がある。二句構造の実現形は{[ハナガ]}{[チル]}となる。また、穎娃町で同じとされているハナジャ「花じゃ」とオナゴ「女子」の音調は、鹿児島では{ハ[ナ] | ジャ}、{オ[ナ]ゴ}となり、ジャよりゴのほうが可能な下降の幅が広い。

- 6) 卓立形・非卓立形の区別は、声調言語である台湾語で、各声調について二つの実現形（本調と変調）が区別され、本調が音調句の境界を成していることに倣った二分法であるが、台湾語の場合、本調が表示しているのは音調句の最後の位置である。
- 7) 列挙した例はすべて前分・後分ともにA型。ただしこれが定型であるとはいえない。筆者のアクセントでは「造反有理」は前分B、後分A。使用頻度の低く型がわからない漢語はA型という傾向によるのかもしれない。
- 8) 副助詞の場合、多くは単独の卓立形をもっており、卓立形をもたない形式名詞類に接続する場合にはこの形が唯一可能な形である。{シ[ロイ] | ハナ} { [パッ]カイ | アツマッタ } 「白い花ばかり集まった」 {シロ[カ] | ト} { [パッ]カイ | アツマッタ } 「白いのばかり集まった」
- 9) 木部(2000: 47ff)では、ゴチャの形の縮約形が記述されているが、筆者はゴタの形を使用し、また鹿児島市内でも筆者の世代ではゴタが優勢であるように感じられるので、この形で記述する。地域方言（鹿児島県北部？）の流入形である可能性もある。
- 10) タイドンは、ト「の」+ジャイドン「だけれども」の縮約形。
- 11) 非卓立形B型で終わる句は、このB型を平板に保つ傾向があるため、先行する単音節卓立音節のピッチを比較するのに都合がいい。たとえばチョモ「と思う」が接続する、{ [フッ] | チョモ } 「振ると思う」と { [フッ] | チョモ } 「降ると思う」では、チョモのピッチはほぼ同じになるのだが、A型の [フッ] 「振る」の母音が下降調を感じられないほど短いとき、はじまりからB型に比べて低く聞こえる。これは聴覚の問題だろうか。それとも生成の段階で句音調によるピッチ上昇が十分に実現していないのだろうか。
- 12) このように“j”と“j̄”に挟まれた位置、つまり、B型アクセント単位とA型単音節アクセント単位の間的位置では、短い単音節アクセント単位の弁別が曖昧化しやすい、と一般にいえる。動詞の現れる環境としては、{マ[ダ] / ナイゴ[テ] | ~ | ト} 「まだ / なぜ~する / しないの」、体言の現れる環境としては、{ナイ[ノ] / ド[ゲン] | ~ | チ} 「何の / どんな~だって」など。

#### [参考文献]

上野善道(1984a)「新潟県村上方言のアクセント」『金田一春彦博士古稀記念論文集』2(言語学篇). 明治書院. 347-390.

- 上野善道(1984b)「N型アクセントの一般特性について」『現代方言学の課題』2(記述的研究篇). 明治書院. 167-209.
- 上野善道(1997)「私のアクセント理論ーフィールドワーカーの視点」『音声研究』1-2. 28-36.
- 王育徳(1987)『台湾語音の歴史的研究』第一書房.
- 川上夔(1953)「「花高し」と「鼻高し」ー東京アクセント段階観の限界」『音声学会会報』82. 6-9.
- 川上夔(1956)「文頭のイントネーション」『国語学』25. 21-30.
- 川上夔(1957)「準アクセントについて」『国語研究』7. 44-60.
- 木部暢子(2000)『西南部九州二型アクセントの研究』勉誠出版
- 金田一春彦(1956)「柴田君の日本語のアクセント体系を読んで」『国語学』26. 初出. 補注を加え『日本の言語学』2(音韻). 大修館書店 443-468. 再録.
- 郡史郎(1997)「日本語のイントネーションー型と機能ー」『アクセント・イントネーション・リズムとポーズ』三省堂. 169-202.
- 平山輝男(1936)「南九州アクセントの研究(一)」『方言』6-4 初出、井上史雄他(1999)編『九州方言考』ゆまに書房. 1. 77-98. 再録.